



2013年4月15日発行（隔月刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2013年4月  
第94号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩 (32) (岡田健嗣) .....	1
点字から識字までの距離 (90) (山内 薫) .....	2
河村幸男さんのお付き合い (岡田剛嗣) .....	10
漢点字版『萬葉集釋注』のご紹介 (岡田剛嗣) .....	14
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子) .....	20
ご報告とご案内 .....	28
漢文のページ .....	29
編集後記 (木下和久) .....	31

## 漢点字の散歩（三十二）

岡田 健嗣



### ご挨拶

本会の機関誌でありますこの『うか』は、昨年八月発行の九十三号を以て休刊しておりましたが、この四月に、九十四号を発行する運びとなりました。偏に読者の皆様のご支援と、本会会員のご支持の賜と、心より御礼申し上げます。

休刊に至りました事情につきまして、既にご承知の方も多いことと存じますが、簡単に申し上げます。

この間の事情と申しましても、全て私一人に関わる事情です。

年来の病でありました僧帽弁閉鎖不全が、発見から八年を経て、いよいよ心不全の候を表すようになりました。主治医のお奨めとご紹介で、横浜の港赤十字病院の循環器外科を受診し、昨年九月、手術を受けました。

その結果軽い心房細動は残りましたが、血液の心室

から心房への逆流はなくなり、心筋への負担を軽減することができて、心不全の進行を留めることができました。執刀して下さいました田淵典之先生のお話です。先生を初め多くの先生方、ICU並びに病棟のスタッフの皆様には深く御礼申し上げます。また同様に、もとよりお世話になっております社会保険・横浜中央病院・循環器内科の小堀先生を初めとする先生方並びにスタッフの皆様にも、深く御礼申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。

そんな次第で本誌の発行も、予定していた昨年十月、十二月、そして明けて二月の三回分を、休刊させていただきました。本会の活動をご支援下さっておられる皆様には、誠に申し訳なくお詫び申し上げます。

術後半年を過ぎ、当初の回復は私の心づもりとは違つて余談を許さない状態もありましたが、現在ではほぼ通常の生活を送れるようになりました。そこでそろそろ「うか」も、復活してもらおうと思うようになりました。

発刊の計画としては、以下のように考えております。

九十四号（本号）、二〇一三年四月。

九十五号、二〇一三年七月。

九十六号、二〇一三年十月。

九十七号、二〇一四年一月。

以上のように、季刊の発行とさせていただきます。

昨年は私は休養を取らせていただきましたが、本会（横浜並びに東京）の会員は、活動を日常的に継続して下さいました。毎年横浜の中央図書館に納入しております漢点字書も、無事納めることができました。これは誠に会員一人一人の実力の為せる業と申しても過言ではございません。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



## 点字から識字までの距離（九十）

野馬追文庫（南相馬への支援）（八）

墨田区立ひきふね図書館 山内 薫

Sさんが活動に参加して下さることになる

本宮市のYさんが産休を取ることになった。YさんからKさんに届いた手紙には次のような決断が記されていた。

「・・・三年前にやつと(?)結婚し、早く二人の子どもをと思っていました。が、昨年、の原発事故で、一度は子どもを一生持つことは叶わないのではないかと、この福島で子どもを持つということに問題はないのかとすごく悩みました。夫婦間で何度も話し合い、何度涙したか分かりませんでした。多分この様な気持ちはあの時福島に住んでいた人たちなら誰しも考えたことではないでしょうか。そして、今年になり、子どもが授かったことを知るにつけ、ここで産まれて育てていくことを選んでくれた命があるなら、それを受け止めて育てていこうと心を決めました。今も全く不安がないわけではありません。今後三〇年いや半世紀以上、原発事故による放射線の影響が残る福島で、子どもを育てていくことは子どもの心身の健康にどう影響が出るか、



った山々を通ります。本当に、以前と変わりない、美しい自然の風景です。」

また野馬追文庫に関しては

「私も、Yさんのように、福島の子どもたちには、楽しい本、声を出して笑えるような本を届けてほしいと思います。それと、生きるためのたくさんの知恵や勇氣、人のやさしさや強さがつまった昔話を。もちろん、人のおろかさも、ですが。昔話は、語ってくれたり、読んでくれたりする大人がいたらいいな、と思います。本のままでは、子どもに届きにくいように思います。県立図書館でも仮設住宅の支援を行っています。現在、福島市内5か所から要望があります。これから本を選ぶところです。」

ただ、地域によっては、図書館が仮設住宅への移動図書館の運行を検討しているところがあったり、仮設住宅と図書館の間を、巡回バスでつなごうとしているところもあります。子どもも心配ですが、高齢者も心配です。」と現状を報告して下さいました。

## IBBY ロンドン大会でのKさんのプレゼンテーション

Kさんの活動母体JBBY（日本児童図書評議会）の親組織であるIBBY（国際児童図書評議会）の世界大会が二〇一二年八月にロンドンで開かれた。その一つのセ

ッションでKさんが野馬追文庫のことにも触れてプレゼンテーションを行った。

「二五日朝八時からのEarly Bird セッションという時間帯にIBBY全体五〇分、私は一〇分ほど時間をいただいで、布の絵本や点字絵本などを含んだ図書を届けている「だいじょうぶだよ」のことで、「野馬追文庫」の報告をさせてもらいました。福島のことを五分ほどという時間の中で、海外の人に「状況を正しく」そして野馬追文庫がどういう支援なのかをつたえることはむずかしいことで、苦しんでプレゼン用意しました。」

その時の原稿は「To the Children of Fukushima, and for Children with Special Needs」という題でその日本語訳は次のようなもの。

「JBBYが現在行っている特別なニードを持つ子どもたちへの支援について二つの取り組みを報告したい。

ひとつは、“daijoubudayo” package (smile and carry on package)と呼んでいるものです。「だいじょうぶだよ」とは子どもが不安におびえているときに、かけることば。心配しなくていいよ、私たちがそばにいるよというような意味です。

被災直後の幼い子どもたちは、おびえがつよく、人へのしがみつき、後追いが強く見られました。本を読

むようなエネルギーはなく、遊びですら一つの遊びが長く続かない様子が見られました。人にそばにいてほしい。本とともに人が一緒にいてくれるような、人と一緒に楽しめる本を震災から間がない時は選書して届けました。日本には、心のケアに素晴らしい力のある本があります。日本の誇る子どもの文化の一つである布の絵本です。布の絵本には本の力(ブックセラピー)と遊びの力(プレイセラピー)の両方が兼ね備わっています。子どもの心の苦しみの表出と回復に、遊びは大変な役割を果たします。この布の絵本の力を、JBYは一〇年間開催してきた世界のバリアフリー絵本展示会を通じて実感してきましたから、すぐに支援に結びつけました。(これらの本は手作りですので、ひとつひとつ作成には大変な手間と時間がかかりますが、現在まで五〇〇点以上、被災地の子どもたちに届けることができました。)

この絵は、被災して一〇日ぐらい、原発の事故後、家を離れ、避難所で暮らしていた、四、五歳ぐらいの女の子が描いた絵です。遊びのコーナーで、もくもくと絵を描き、はじめこのような絵でした。その近くで、私はこの布絵本を使って、子どもたちと歌を歌っていました。こんなふうになあに？

♪ 数字の一は、なあに？ 工場の煙突 もくもく

数字の二は なあに？ お池のアヒル があがあ 周りの子どもたちが、私も私もと加わり、そして彼女もおずおずと参加してきました。二回ぐらい一緒に歌いながらこの絵本を楽しんだ後、彼女はさつき描いていた絵に色をつけ始めました。そして次に描いた絵は、こんなふうに変わっていました。

被災児の中に、必ず障害のある子ども、震災前も特別なケアを必要とする状態の子どもたちがいます。被災地の子どもを必要とすることを考えるとき、必ずその子どもたちのことも忘れてはいけなと思います。それはJBYのメンバーとして、JBY障害児図書資料センターの活動をJBYの中で責任者としてやってきた私の使命とも思いました。

肢体不自由の子どもたちには、めくりやすく、自分の力で引く張ったり操作がしやすいように工夫した手作りの作品を。見えない・見えにくい子どもたちには、触る絵本や点訳絵本・拡大図書・音の出る遊具などを届けました。自閉症の子どもたちには、車や電車が大好きな子どもたちが多いので、そんな本や遊具を選びました。福島の地で、放射線の影響で外で遊べない子どもたちのためには、少しからだを動かして楽しめるような作品や、紙芝居などみんなで楽しめるような本を届けました。こんなふうになあに？

る本の内容は違っていきます。何よりも長引く避難生活・仮の生活の中で、彼らを支える家族の疲弊は大きく、そんな中で、子どもの笑顔が、なにより周囲の大人をも励ましました。

次に、福島の子どもたちへの支援について報告します。野馬追文庫といえます。

南相馬市という地域、ここは地震と津波の被害と放射線被害を受けた三重苦の地域です。その人々の生活を見続けて、そこに今住んでいる子どもたちに、毎月震災が起きた日と同じ一日に本を届けています。その小さな図書コーナーを野馬追文庫と名付けています。野馬追というのは、この地域の伝統的なお祭りの名前です。

現在、南相馬市内の子どもの半数はこの町から転居しています。父親だけが仕事の関係で南相馬に残り、お母さんと子どもたちは別の場所で暮らすという、家族が離れ離れになっている場合も多い一方で、半数の子どもたちはこの地で生活を続けています。

震災直後の四月、五月当時は、この地域の避難所には食べ物などの支援助物資すら容易に届けることはできませんでした。私たちの本も当時避難所を回る小児科

のドクターに託しました。当初は先に述べた「だいいうぶだよ」と同様に、人と楽しめて、人がそばにいてくれるような本、布の絵本などを届けました。今は、「元気になれるような、思わず笑っちゃうような楽しいお話を届けてほしい」これが現地からの一番の要望です。

仮設住宅には、高齢者もたくさん住んでいます。日本に伝わる昔話をよく選びます。昔話には異界の力がよく登場します。現実はどうあがいても解決されない、今自分たちが抱える問題の中で、異界の力に希望を感じるのかもしれませんが。

福島の人たちに支援で何を今一番希望するかと問うと、とにかく私たちが忘れないでいてほしいという答えが帰ってきます。ささやかなことですが、一日に必ず毎月本を届けること。忘れないよということが私たちからの一番のメッセージです。

Yさんという一人の福島図書館員が野馬追文庫に協力してくれています。彼女はJBAZのメンバーでもあります。彼女は震災の五日後にこんなメールをくれました。

「今、現在進行中の原発事故は現場から五〇キロ離れ

たここでもまさに「戦場」にいるような心境です。：：日々続く不安と恐怖、そして余震が続くため、不眠が続き、自分自身どうしたらよいかわかりません」  
一年後に彼女はこの時のことをこんな風に言っています。

「私は一年前のあの震災のときにふとグリム童話の「忠臣ヨハネス」というお話しが頭をよぎりました。あの未曾有の震災の中にいて、あの話を思い出すことができて、私自身が、人間としての尊厳を守ることができたのではないかと今になると振り返ることができません。人間は、苦悩の中にあるとつい憎しみや恐怖で我を忘れてしまいますが、困難をあえて引き受ける覚悟を持つことが必要だと忠臣ヨハネスは私に言ってくれたような気がします。このような経験からも、私は自然に物語の中にある力を自分の生きる糧にできると考えています。」

そして今彼女は新しい命を宿しました。その彼女からのメッセージです。

「：：昨年の原発事故で、一度は子どもを一生持つことは叶わないのではないか、この福島で子どもを持つということに問題はないのかとすごく悩みました。夫婦間で何度も話し合い、何度涙したか分かりませんが

した。そして、今年になり、子どもが授かったことを知るにつけ、ここで産まれて育っていくことを選んでくれた命があるなら、それを受け止めて育てていこうと心を決めました。今も全く不安がないわけではありません。でも、前を向いて生きていくしかありません。：：子どもたちに良い本を与えることが、何よりのことだと思えます。大人が子どもにしてあげられる数少ないことのひとつだと私も信じています。どうか少しずつでよいのでこの支援(野馬追文庫)が、息の長いものであつて欲しいと心から願っております。私も私しか守ってあげられない命を育んでいくことに、今は全力を尽くしたいと思えます。：：」

JBBYのみなさま、JBBYは今、人類が体験したこのない課題に立ち向かっています。どうぞ私たちを支えてください。」

Kさんは帰国後次のように述べている。

「今、私の中でYさんの声ほど、福島状況、福島の人たちの気持ち、そして、本の力を信じてくださっているメッセージを伝えられるものはなかったのです。大会にはJBBY関係者以外の日本人の参加も多く、むしろ「JBBYや(あしたの本)の「仲間」よりも、それらの日本人の皆さんの受け止めが温かかった。特に図書館員



の方たちには、Yさんの気持ちとてもひびいたようです。図書館員として応援したい仲間意識が強いんでしょうね。何人かは涙を流して聞いてくれました。」

### NPO法人高知こどもの図書館の協力

Kさんから次のようなメールが届いた。「高知こどもの図書館のF館長に協力をおねがいして「野馬追文庫にあなたが贈りたい子どもの本一冊」を集めてもらうことにしました。本に自分でシールを貼ってもらいメッセージカードをつけてもらいます。どのくらい集まるかはやってみないとわかりません。Fさんはクリスマスの本なども呼びかけてみたいとおしゃっていています。」

NPO法人高知こどもの図書館はKさんが中心となって行っているJBRVの世界バリアフリー絵本展を何度か開催しているNPOの図書館で、Kさんもこの図書館の会員になっていることから呼び掛けたのだった。高知こどもの図書館のホームページには下記のような呼びかけが載っている。

「『野馬追文庫活動』にご協力下さい。」

南相馬市の三四仮設住宅に毎月一日、本を贈る活動にNPO法人高知こどもの図書館は協力することに

いたしました。

仮設住宅の子どもたちが笑顔になるよう思いを込めた本を一冊で構いません。こどもの図書館にお届けください。お預かりした本は「野馬追文庫活動」の事務局にこどもの図書館から責任を持って送ります。

不要な本ではなく、贈り物となる本をどうぞよろしくお願いいたします。よろしければその際、送料として一〇〇円お預かりさせていただきますと助かります。

南相馬市という地域、ここは地震と津波の被害と放射線被害を受けた三重苦の地域です。

南相馬市は、現在年間二〇ミリシーベルト以下の「避難指示解除準備区域」、年間二〇ミリシーベルト超五〇ミリシーベルト以下の「居住制限区域」、年間五〇ミリシーベルト超の「帰還困難区域」の三つに分かれています。

その人々の生活を見続けて、そこに今住んでいる子どもたちに、毎月震災が起きた日と同じ一日日本を届けます。

野馬追というのは、地域の伝統的なお祭りの名前です。」

この活動は早速地元の新聞でも取り上げられた。

## 高知新聞二〇一二年一月二八日の記事

「高知から南相馬に絵本を

『こどもの図書館』呼び掛け

一冊にメッセージ添えて

高知市永国寺町の高知こどもの図書館（F館長）が、福島県南相馬市の仮設住宅で暮らす子どもたちへ絵本を贈る活動を進めている。絵本は、県民から寄せられた「思いのこもった一冊」。同館は「仮設住宅がなくなるまで送り続けたい」としており、絵本の提供を呼び掛けている。（横山仁美）

同館の活動は、日本国際児童図書評議会（JIBI）などが毎月一日、同市内三四カ所に数冊ずつ送っている活動「野馬追文庫」＝事務局、東京都に協力するもの。

きっかけは同事務局を務めるKさんが、高知こどもの図書館会員でもあったこと。

今夏、「取り組みを広げたい」とのKさんの依頼を、「原発事故の影響などで、仮設住宅がなくなるまで長い時間がかかる。『忘れていないよ』と伝え続けたい」（F館長）と快諾。全国の図書館ではじめて協力することになった。

提供を呼び掛けているのは、長年大切に読んできた絵本、子どもの時に大好きだった絵本。一人一冊でか

まいません。どうしてこの本なのか、メッセージを添えてもらえたら」とF館長。同館利用者らに訴え、これまで二〇冊を贈った。

本は同館へ持参を。毎月末に締め切って贈る。送料一〇〇円の寄付も同時に募っている。問い合わせは同館（〇八八・八二〇・八二五〇）まで。」

高知こどもの図書館からは一月一日付の『さむがりやのサンタ』（レイモンド・ブリッグス作・絵すがはらひろくに訳 福音館書店）などクリスマスの本を中心とした一七冊の南相馬市送付本リストが届いた。これらの本は一二月に贈る本と一緒に野馬追文庫として贈られることになった。

なお、九月には、紙芝居『うまいものやま』（佐々木悦作 箕田源二郎絵 童心社）とまどみちおの詩集『てんぷらびりびり』大日本図書、一〇月には『三びきのやぎのがらがらどん』（マーシャ・ブラウン作・絵 福音館書店）と『おだんごぱん』（ロシア民話 せたていじ訳 わきたかず絵 福音館書店）、一月には『おおきなおおきなおいも』（市村久子作 赤羽末吉絵 福音館書店）、一二月には『イソップのお話』（イソップ 著 河野与一訳 岩波書店）と高知こどもの図書館から送られた絵本を送付した。

## 河村幸男さんのお付き合ひ

岡田 健嗣

左は、昨年亡くなられた河村幸男さん（岡田の友人）の遺稿集を編むに当たって、岡田が依頼され、執筆したものです。河村さんは本会には直接関わってはおりませんが、岡田が会の発起を思いつき決断するのに力あつたひとであることを、申し述べます。

昨年（2012年）7月26日の昼過ぎだったか、学生時代の友人の一人から電話があつた。ずっと古い友人であつたので、互いにめつたに電話など交わさない。本来なら久闊を叙するところだが、先方の声音が少し違つていた。

「まだ知らないようだね。河村幸男くんが、亡くなつたんだ。明日お通夜、明後日告別式だ。」

後に知つたことだが、7月25日の朝、急性心不全で倒れられて、12時15分に永眠されたとのことであつ

た。

友人とともに通夜の席に列席した。が、あれほど現実感と乖離した通夜は、これまでになかつた。その意味では、現在もその感は継続しているとも言える。こゝ暫くは、河村さんとお会いする機会を得られずにもいれな。そういう時間が、その乖離の大きさでもあるのかもしれない。

彼とのお付き合ひは、私が大学というところへ行つてみようと決心したころから始まつていたとも言える。勿論実際にお会したのは、入学してから後のことである。しかし私が大学へ行こうという気持ちになつたのには、行けないという現実を受け入れないことに決めたことに始まる。（このことはここに置く。）

1972年に私は、明治学院大学に何とか潜り込んだ。勿論学生本来の務めに勤しむべく、講座を履修し講堂にせつせと通つた。（この辺りにも詳説が必要であるが、ここに置く。）

2カ月もすると学校の中の配置や仕組みも飲み込めてきて、私の本性がむくむくと顔を擡げてきた。気の緩みと言えば誠にその通りなのだが、各科目の講義が、そろそろ鳥羽口から一步踏み込み始めていた。つ

まりわかるものはわかるが、わからないものはわからない、学生の自分はそんなとき、図書館かどこかそんなところに籠って、わかるまで頭を捻らなければいけない、だが私はそうはしなかった。

河村さんと会ったのはそんなときで、直ぐに意気投合とは行かなかったが、その後話をするようになったところを見ると、まずまずの出会いだったと言えるだろう。

あるサークル活動の部屋を訪れた。そこで何が行われているかを知りたかったのも確かだが、それ以上に、話のできる人がいないか、そんなことを求めて出かけていった。

河村さんと実際にお会いしたのが何時で、どんな風だったか、これは遙かな時間の彼方のことだというばかりでなく、お客様然としていた当方と、何となく居心地の悪そうな河村さんのことであつたし、私は取り立てて彼に会いにいったわけでもなかったりして、今では誠に茫としたものになってしまっている。そんな風にして何度か足を運んでいるうちに、当方の緊張も緩んで、言葉を交わすようになったのだろう。

そんな折り、既に彼と、2009年に亡くなられた

安田章さんが、やはり昨年鬼籍に入られた吉本隆明氏の『言語にとつて美とは何か』の読書会を催しておられて、誘つて下さつた。その経緯がどういふものだったか失念したが、恐らく軽く、「読み上げるから、出てこいよ」といった調子だったのだろう。読み上げるといつても、手探りでありぶつつけであり、互いに初めてのことであるから、河村さんにも安田さんにも、さぞかしご苦労をおかけしたものと想像できる。

『言語にとつて美とは何か』も「表現転位論」にまで進んでいた。私はそこからの参加となつた。

さらにもう一冊、平行して始めようと話が決まつて、サルトルの『想像力の問題』をやってみようということになつた。彼らは私のために読み上げてくれながら、私はそれをカセットテープに録音するという作業をし、そして今から見れば誠に稚拙に違いないのだが、それぞれの解釈を述べ合つた。

どういふことをやつたのであつたか、今思い起こせば『言語にとつて美とは何か』の「表現転位論」では、言語表現を表出のレベルと捉えて、さらにその表出のレベルを「自己表出」と「指示表出」の幅と捉えることができるという。そして究極的な「自己表出」

とは、意味を超えた言語、言い換えれば表出者本人にすらわからない言語のレベルであり、「指示表出」とは、他者に向かう、その究極は己を消去した言語、伝える機能のみの言語のレベルであるという。これを文学作品に当てはめると、「自己表出」はより書き言葉での表現となつて、「文学体」と呼ぶことができ、「指示表出」はより話し言葉での表現となつて、「話体」と呼ぶことができるという。

『想像力の問題』では、サルトルは「想像力」を、一つの幅と捉えている。こんな例を出している。

正六面体を思い浮かべてみよう。するとすぐさま立方体が目に浮かぶ。立方体であることは間違いない。

この立方体を、他の方法で目の前に置いてみよう。実際に立方体の物体を目の前に置いて、視覚的に観察するとする。するとこちらに向いている面はよくわかる。正方形らしい面が向いている、その脇や上にも正方形かもしれない面が見えている。しかしそれらは正方形であることを保証しないし、見えていない部分も、立方体の一部を示す形状であるかどうかとも保証しない。

それでは正六面体を観察して得られた知識はどう

か？同一の面積の面を6つ有し、同一の長さの縁を12個有し、角を8つ有し、2つの角がなす角度は90度である。これらは確かに正六面体の特徴である。従つて正六面体を説明するにはこれでよい。しかしこれは、視覚で捕らえたときとは別の意味、像ではない。想像とは言えない。

視覚で捉えた正六面体は、こちらを向いている面の像を結びはするが、それが正六面体であるかを保証しない、また正六面体に関する知識は、正六面体を説明しはするし、像を喚起するかもしれないが像ではない。想像力は、正六面体を思い浮かべれば正六面体が見え出るし、それは確かに正六面体であつて、視覚では死角になつていない部分も、正六面体を構成している。このように想像力は、全体を把握しているところは知識に近似しているし、また像を結ぶところは知覚（視覚）に近似しているが、何れとも異なっている、と言っている。つまり「想像力」は、像を結んでいることが最も特徴であつて、その像が如何に精緻であるかは、既に得ている知識如何であると言う。

『言語にとつて美とは何か』の「表現転位論」では、「表出」という概念が提出されて、明治以降の文

学作品を題材に、言語表現の変遷が論じられていた。だがそれだけではない。読者としての私も、試されていたとも言える。

少し後に、フランス構造主義の書物が、どしどし翻訳されてきた。中でもロラン・バルトの『零度のエクリチュール』と『テクストの快楽』は、センセーショナルに受け止められていた。私も何とか読むことができたが、力不足なのだろう、著者の手を離れたテクストは、著者の支配を離れて自由に歩き回る。それを読者がどう読むか、批評家かどう批評するかは、著者には関わりないことだ、というほか読めなかった。どうも別段新しいことが言われているようでもない、読者や批評家がどう読むか、確かにそれは任意である。著者には関わりはない、読者や批評家の力が試されるだけだ、私はそう受け止めた。

むしろずっと後に私は、言葉というのが如何に通じないものか、ということに直面した。現在も同様の経験をししばしするのだが、そんな折りに、あの「自己表出」と「指示表出」が思い起こされる。発語者の言葉がそのまま他者に受け止められること、それを期待することそのものが錯誤なのだ。むしろ通じないこと

を前提に発語し、また他者の言葉もそのように受け止める必要がある、こうすれば、間違いも少なくなる、そのように考えるようになった。

また「想像力」は思いがけなく私に大きな示唆を与えてくれた。この40年を振り返ると、何かをやらなければならぬ、決断しなければならぬ局面に幾度か遭遇した。今思えばそんなとき、その決断に必要とする情報に恵まれたときは案ずるより産むが易しとばかりにうまくことが行くものだが、情報が乏しいときは、誠に悲惨な結末を迎える。そんな折りを振り返ると、うまく行くときは、例外なく頭の中にあるべき像が結ばれている。像が結ばれないときは、これも例外なくうまく行かなかった。その決断も多くの場合迫られてのもので、情報は乏しいのが普通だった。

河村さんのお付き合いはこのように40年に及んだ。そのお付き合いも日常を離れてのことだったように思う。

昨年の7月25日は私も、僧帽弁閉鎖不全の手術に向けて、紹介状を受け取るために病院にいた。私は幸いにして生還できた。どこでこのような差ができたのだろうか、残念でならない。

# 漢点字版『萬葉集釋注』のご紹介

岡田 健嗣

本会では毎年、横浜市中心図書館に漢点字書を納入しております。昨年度から、〈万葉集〉の解説書に取り組むことに致しました。

伊藤博（はく）著

『萬葉集釋注 一』（集英社文庫、二〇〇五年）

いよいよ〈万葉集〉だ、私の中には、こういう気持ち  
ちが沸々と湧き上がっていました。

私が本会の活動を開始したのは一九九六年、今年は  
十八年目を迎えたことになります。

本会の活動は、今思えば驚きを禁じられません、  
横浜国立大学教授の村田忠禧先生のご仲介をいただいて、  
学習研究社様から『漢字源』（藤堂明保編、一九  
九二年）の電子データをいただいで、漢点字版・全九  
十巻を完成させたのが、その始まりでした。確かに電  
子データをいただけたことによって、打ち込み・校正

という、漢点字訳の活動の基本的な作業はなかったと  
は言え、漢点字書が九十冊とは、誠に気の遠くなる作  
業が半年あまり続きました。そして九七年春に、完成  
を見ることができました。この九十冊は、当時横浜市  
議会議員を務めておられました大滝正雄先生のご尽力  
によって、中央図書館に納められて、どなたもが手に  
取っていただけるようになっていきます。

このようにして始まった活動をどう位置づけるべき  
かは、本会の規約に盛り込まれています。その目的と  
して、三つの柱を立てました。①基本的に必要な資  
料。これは辞書を初めとする一般には誰もが持っている  
資料です。しかし視覚障害者には、大変手に入れ難  
いものでもあり、漢点字版となると、ほぼ手にするこ  
とは不可能なものです。②ニーズに応える。読みたい  
本を手にしたというのが普通の読書欲です。これに  
応えたいと考えました。漢点字書は買うことも借りる  
こともできないからです。③漢点字の普及。希望者を  
募って漢点字の学習会を主催する、必要があれば、テ  
キストを作るといことです。

活動を振り返ってみますと、結果的にこの中の基本

的な資料の製作に最も力を注ぐことになりましたが、その中でも私には、最終的な目標として、〈万葉集〉の漢点字版を作りたいという願いが強くなりました。私が最初の読者になれなくてはいけない、〈万葉集〉を読むだけの読みの実力をつけて、早く取り組みたいという気持ちだが、徐々に高まってきたのでした。

二〇〇九年には『常用字解』（白川静著、平凡社、二〇〇三年）を完成して、視覚障害者が漢点字を通して書物を読むことで、一般の読書に匹敵できる読書が可能であることがクリアできたという手応えを得ました。このことは私が試験台になって、漢点字の表記と触読の試行錯誤の末、到達したものです。そして、漢点字であれば視覚障害者も古典から現代文まで、何でも読み取ることができるといふ確信に、やっと至るところができました。確信を得るのにこれだけの時間が必要であったということをも物語っています。日本語を表記する一般の文字と、視覚障害者には必須の触読文字である漢点字が、その読みにおいて、充分拮抗し得るといふ確信が、〈万葉集〉の漢点字訳に踏み切らせたのでした。

〈万葉集〉と言っても数え切れないほどの解説書があります。今回も墨田区立あずま図書館の山内さんのお力を借りて、選書しました。これも誠に間違いのない選書であったことを、最初の一冊の完成によって知ることができました。

漢点字訳書の原本は、集英社文庫の『萬葉集釋注』ですが、同名のハードカバーが十年以前に刊行されています。そちらを参照しながらの作業となりました。文庫版の体裁はハードカバーを踏襲するものではありませんが、残念ながら全てが収められているわけではなかつたからです。とりわけ万葉仮名の原文は、割愛されていきましたので、その部分だけ、ハードカバーから借用することにしました。

今回完成したのは、巻一と巻二で、最も古い時代の「雑歌、相聞歌、挽歌」が収録された部です。会員による校正が終わったところで、ほやほやの、まだ湯気が立っているような熱の籠もった本をいただきました。この一冊を最初から最後まで読ませていただきました。

〈万葉集〉は、冒頭が最も劇的だということを聞いたことがあります。一の雄略天皇御製の求婚歌、二の



舒明天皇の国見歌、これは確かに圧倒されましたし、日本語表現の歴史に、大きな位置を占めるものであることは、私にもよく理解できたのでした。通読だけではなく、より詳細に勉強してみたいと思わされました。

ざっと拝読しての感想を述べさせていただきますと、ここに現れる歌人の中でも、額田王（ぬかたのおほきみ）・柿本人麻呂・笠金村の三人は、違わずオリジナリテイー豊かな表現者で、日本語の表現の変遷を担った人々であることを、作品から知ることができたということ、またこの〈万葉集〉が、表現の実践場であって、その変遷をそのまま残していることを、作品に触れて知ることができたということ。このことは誠に幸福なことと言わなくてはなりません。

もう一つ気づいたことがあります。

歌には先だつて、詞書きと呼ばれる前書きがありません。また歌の後に、左注と呼ばれる書き込みがありません。詞書きは、〈万葉集〉編纂以前にまとめた編者の手になるもの、すなわち作歌されてからあまり時を経っていないころの記載と考えられるものです。左注は、

〈万葉集〉編纂に当たったと考えられる大伴家持、あるいはその周辺の人々の手になるものと考えられます。その時間的隔たりは、凡そ百年余りと考えられます。しかしながらその表現は、非常に大きく変化しているように感じられたのでした。左注の表現は、非常に読み易く、言うならば、現代にぐっと近づいているように感じられたのでした。

以上の二点が、私の感想です。

ご紹介の最後に、先の三名の歌を二首ずつと、著者の伊藤博先生のお言葉の抜粋を引用させていただきました。〈万葉集〉の成立と本書の目論見が、過不足なく語られています。ご精読下さい。

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ  
今は漕ぎ出でな (八 額田王)

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや  
君が袖振る (二〇 額田王)

栗浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 舟待  
ちかねつ (三〇 人麻呂)

石見のや 高角山の 木の間より 我が振る袖を

妹見つらむか (一三二) 人麻呂

高円の 野辺の秋萩 いたづらに 咲きか散るらむ

見る人なしに (二三一) 金村)

御笠山 野辺行く道は こきだくも 繁く荒れたる

か 久にあらなくに (二三二) 金村)

### 『萬葉集釋注』の発刊にあたって

『萬葉集釋注』全十一冊(本巻十冊、別巻一冊)

は、集英社創立七十周年を記念する出版の一つとして  
発刊されるものである。折しも平成七年(一九九五)、  
齡(よわい)七十歳に当たり、著者にとつては  
古稀を記念する仕事となる。奇縁といふべきである。

／「古代和歌史研究」という名を副題に持つ、全八巻  
の著作(塙書房刊)がある。著者年来の万葉集研究を  
集大成したもので、上下二冊ずつに組まれて四部を構  
成し、それぞれ、「万葉集の構造と成立」、「万葉集  
の歌人と作品」、「万葉集の表現と方法」、「万葉集  
の歌群と配列」をテーマとしている。著者は、かねが  
ね、もし機会があるならば、この八巻本の考察を土台  
とし背景とする、万葉二十巻四千五百余首の注解を世

に問うてみたいものと、ひそかに考えていた。夢見た  
題名は『釋万葉』。／万葉集の従来の注釈書は、語釈  
を中心に一首ごとに注解を加えるのを習いとしてい  
る。しかし、万葉歌には、前後の歌とともに味わうこ  
とによって、はじめて真価を発揮する場合が少なくな  
い。作者自身によってそのように組まれている場合  
と、編者の手によってそのように構えられている場合  
とがあるけれども、たった一首によって孤立するよう  
なことは、むしろ稀である。一首だけで立つように見  
える場合でも、たとえば、開卷冒頭の雄略御製(1  
一)や、万葉終焉の伴家持詠(20 四五―一六)のよ  
うに、他の歌々との関連で重い意味を有しながらそこ  
に位置していることが多いのである。／にもかかわら  
ず、そのような歌々を一首一首切り放して扱い、歌群  
の構成や組織について無頓着な姿勢を取るといふので  
あれば、それは、万葉びとの心に仲間入りしたことには  
ならないであろう。それで、万葉歌を歌群としてあ  
るがままに扱い、その歌群の題詞の意味、口語訳、語  
釈、特性のいっさいを、一つの「釈文」の中で総合し  
て繰り広げる注釈書、すなわち、歌々の生きた姿、歌

々の本来の息づかいを蘇らせたいと企図する著者の解  
釈の展開がそのまま一つの“万葉集”になるようなもの、つまりは、先に述べた『釋万葉』なるものを書いてみたいと、ひそかに考えていた。／そんな折、集英社の時の出版部長、塩沢敬氏から、万葉全巻の注釈の執筆を依頼された。昭和五十五年（一九八〇）の春、今から十五年前のことである。内容については著者に一任ということで、すべてが渡りに舟であった。（中略）／したがって、書名も変更の必要に迫られ、思案の末、『萬葉集釋注』と名告るのが適切だということに落ち着いた。／しかし、著者としては、『釋注』とはあくまで“解釈としての注”の意で、「釈文」に主体を置く名だと考えている。（中略）／平安朝初期、村上天皇の天曆五年（九五二）、源順（みなもとのしたかう）たちがはじめて万葉集を訓（よ）み解（と）いて以来、千余年。万葉集研究の道は古く久しい。（中略）／そもそも、かの村上天皇五年に万葉集の研究が開始されたのは、すべて漢字ばかりで書かれている万葉集を、漢字の知識の乏しかった当時の女性たちに開放するためであった。万葉集が女性を中心とする一般の人々から無縁になっていることを嘆いた村上天皇は、源順以下五人の学者に万葉歌の訓み解きを命

じたのである。順たちは、およそ二十年の歳月をかけて万葉歌の大部分（四千一百首ばかり）に訓をほどこした。こうして、万葉集はようやく日の目を見、一般に流布するようになった。この『萬葉集釋注』は、その本来の研究の姿に立ち帰ることを常に意識しつつ、著者の読解の内にある万葉集を、できるだけわかりやすくかつ生き生きと提供することを意図しながら、書かれた。／万葉集二十巻は一朝にして成った歌集ではない。それは、桓武朝延暦二年（七八三）頃、八十余年の歳月を経て集成されるに至ったものと認められる。巨大な増築家屋のような歌集、長い時間のもと、多数の工匠たちの手を経て成り立った歌集、それが万葉集なのである。そういう歌集でありながら、万葉集二十巻は、結果として、次ページに示すような見事な構造を有している（拙著『万葉集の構造と成立』下）。／本書『萬葉集釋注』は、主要部分を二巻ずつ一組で十冊とし、それに別巻一冊を添えるという組織を持つが、これは便宜の措置ではなく、次ページに示した万葉集二十巻の構造を考慮してのことである。巻一・二で一冊、巻三・四で一冊というように組み立てられたことよって、読者は、ここにいう万葉集二十巻の体系に、ごく自然に対応しながら万葉集を読み進

めてゆくことができるであろう。(中略)／しかし、万葉集二十巻について大きな体系を有する一つの作品体と考える本書、歌群の位置と構成に関心を注ぎながら「釈文」を主体として展開される本書は、辞書としてのみ扱われることを望まない。誤解を恐れずに言えば、本書は、万葉集二十巻という「作品」に対する一貫した読み物である。一字一句を尊重するという姿勢を貫きながら、懸命かつ自由に繰り意広げられた万葉の物語である。よって、読者には、できることなら、本書について、「釈文」を中心に、順序を追って読み継いで行って下さることをお願いしたい。

#### 第一部(巻一〜巻十六)

- 巻一、巻二―中核的古撰集―古歌巻
- 巻三、巻四―拾遺の後撰集―古今歌巻
- 巻五、巻六―天平雜歌集―今歌巻
- 巻七、巻八、巻九、巻十―三部立・四季分類集―古今歌巻

- 巻十一、巻十二―古今相聞往來歌集―古今歌巻
- 巻十三、巻十四―長短歌謡集―類聚歌巻
- 巻十五、巻十六―長短物語歌集―付庸歌巻

第二部(巻十七〜巻二十)  
巻十七、巻十八、巻十九、巻二十―日記的歌集―別類歌巻

ついでながら、本書は拙著八巻本を土台とし背景とすると先に述べたが、煩雑を避けるため、その典拠をいちいち示していない場合が多いことをお断りしておく。また、どの巻も初稿脱稿後十数年を経ており、その間に数々の新説が提出されたけれども、読者に対しては、著者多年の持論を見ていただくよう、多く初稿の姿勢を貫き、新説の参照は必要不可欠な一部に限った。なお、このたびの第一冊について言えば、巻第一に關しては、別に拙著『万葉集全注 巻第一』(有斐閣刊)があり、巻第二に關しては、拙著『万葉集相聞の世界』(塙書房刊)があることを付け加えておきたい。(後略)

一九九五年(平成七)七月一日

伊藤 博

## 「東京漢点字羽化の会」第81回〜88回

### 例会報告と、わたくしごと

木村 多恵子



2012年8月から、2013年3月までの例会報告は、開催された日を記し、打ち合わせた内容は簡単にした。

8月の例会(第81回例会)2012年8月8日(水)

13…30、15…30、場所 港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

いつものように朝日新聞の「季をひろう」の入力担当グループ、8月の11日、18日、25日、9月1日、9月8日の各土曜日の組み合わせを決めた。

「季をひろう」の今月の点字印刷は偶数月なので、お休みの月です。

NHKボランティアネットサイトが無くなり、ボランティアの活動報告や活動していただくボランティアの募集などの記事を掲載させていただくところがなくなりました。これに代わるよいネットサイトや、ボランティアの募集のチラシを置かせていただく場所をもっと探す必要を感じている。

「ニッポン人・脈・記」の中ででくる「絵文字」

を入力するかどうか話し合ったが、内容から考えるとやはり必要であろうということになり、その表し方を検討し、ケイタイに使われている、絵文字を説明している音声も参考にしながら、岡田さんに決めていただくことにした。

8月18日の学習会の日に「羽化93号」を皆様にお配りし、そのほかは8月20日にお送りした。

新たに出てきた「古語辞典」の入力についての約束事を決めた。

9月の例会(第82回)2012年9月12日(水)

時間と場所はいつもと同じ。

岡田さんは欠席ではあるが、例会は滞りなく行われた。

「季をひろう」の担当グループを決めた。

9月19日にIさんが、7月と8月の「季をひろう」の点字印刷をするために、横浜へ行つてくださることになった。Iさん、何時もありがとうございます。

羽化の代表である、岡田さんの健康状態について、会員一同こもごも案じながら、お見舞いのことを相談した。

「人・脈・記」のレイアウトや、入力方法を、もう

少し細かく決め、ファイル名に入力者名、校正者名を加えることなどを丁寧に打ち合わせた。

校正グループは「岩波古語辞典」と同じで、最終まとはSさんをお願いした。Sさんよろしくお願いいたします。

会員のお一人が「パソコンによる漢点字訳ボランティア募集講座開催のご案内」のチラシの第一案を作ってきてくださったって、東京漢点字羽化の会の活動状況も書かれていたが、さらにこれについて、みんなで検討した。このチラシを置かせていただくところも沢山探したい。

9月22日の学習会は休会にした。

### 10月の例会(第83回) 2012年10月10日(水)

「季をひろう」の入力担当を決めた。

10月は点字印刷は休みです。

「古語辞典」を纏めてくださっているSさんから、辞典に出てくる発音記号の使い方について、再確認して欲しいとの提案があり、改めて検討した。

特別賛助会費として、Tさんからご寄付をいただきました。何時もありがとうございます。

10月20日(第63回)の学習会は皆様のご協力をいた

だいて、テキストの予習を兼ねて、木村がお話させていただきました。

学習会の教材に使う点字ラベルが、最近購入したものが、あいにく不良品で、点字が消えてしまうという不具合がおき、レーズライターの漢字を、何時も作ってくださるSさんが、何枚も書き改めて作り直してくださることになった。

### 11月の例会(第84回) 2012年11月7日(水)

岡田さんの健康状態について、簡単に、齋藤さんに報告していただいた。

「季をひろう」のグループ担当を決めた。

11月21日に、9月と10月の「季をひろう」の印刷について打ち合わせた。当日、事情により、お二人の方が印刷に行ってくくださった。お二人の方ありがとうございました。

「人・脈・記」の進捗状況を確認した。

横浜羽化の会の、ごくごく簡単な活動状況をお話した。

「古語辞典」を入力するための原本をお持ち帰りくださった。

11月の学習会(11月17日予定)は休会になった。

## 12月の例会(第85回、活動8年目に入る)

2012年12月12日(水)

久しぶりに岡田さんが出席できて、ひとまず會員一同一安心した。

岡田さんの健康状態についてお話をさせていただいた。

ヒューマンプラザのお部屋を予約する方法が少し変わったので、そのことについて會員内で改めて確認した。

朝日新聞の「季をひろう」の入力グループを決め、入力方法を再確認し、新たなものについて決めた。

「人・脈・記」についてはもう少し余裕をもって新年の例会で話し合うことにした。

今年最後の例会なので、ややのんびり会を進めた。

## 12月の学習会(第64回) 2012年12月22日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 18:30 ~ 20:30

学習会に岡田さんが出席できて皆さん大歓迎、レイチェルも盛んに尻尾を振って喜んでおり、この点岡田さんも大満足なさっていた。

皆様、今年もいろいろありがとうございました。なにより、岡田さんの健康状態がすっかりよくなりました

ように。来年もどうぞ皆様特にご健康にお気をつけに  
なってください。そしてどうぞよろしくお願いいたします。

## 2013年1月の例会(第86回)

2013年1月9日(水)

本会に入会希望された方お一人が、ヒューマンプラザの紹介で、今日から参加してくださった。また、来月は、横浜羽化の會員Sさんの親しいお友達が、新宿区にお住まいなので、東京の方が活動しやすいのではないかと、東京を紹介してくださった。まず1月20日の新年会に、Sさんとお見えになり、3月の学習会から参加してくださることになった。

『人・脈・記 〈日本語の海へ〉』の、まだ少し入力、校正が終わっていない部分を確認した。もう完成間近である。

「季をひろう」のグループ分けを決めた。

「古語辞典」の進捗状況の確認をした。

ちょうど新しい會員をお迎えしたので、會員全体のおさらいも兼ねて、岡田さんが漢字の成り立ちと、漢点字について、「六書」、その他について解説した。

1月16日「季をひろう」の点字印刷をしてください

た。Iさんいつもありがとうございます。

2013年1月19日に予定した学習会は、学習者のスケジュールが取れなかったので休会。

## 2月の例会(第87回) 2013年2月13日(水)

会員のお一人が、この会の活動についてお知り合いにお話くださり、今回は「見学なさる」ということでお出でになられたが、関心を深めてくださり、入会をお決めくださった。

横浜のSさんのご紹介の方は、3月の学習会るときから参加してくださることになったが、現実には、「少しづつ慣れてゆきたいので」とのお申し出で、メールを通じて入力をはじめてくださっている。

わたしはうれしさと緊張とで一杯である。どうぞますますよい会になりますように！

いつもの「季をひろう」のグループを決めた。新しい方にも、早速グループに入っていたら、まず慣れていたらくことにした。

今回は、ルビの付け方についての話し合いがなされた。

古語辞典は、200ページまで完成し、「あ行」を終えたと、担当の方からの報告があった。それぞれ

皆様、古語辞典の入力するところをお持ち帰りください。あるいはPDFファイルを送っていただいたりして、地道にお仕事を続けてくださっている。

## 2月の学習会(第65回) 2013年2月23日(土)

12月の復習をした後、岡田さんが「万葉集」について、万葉仮名について話した。

## 3月の例会(第88回) 2013年3月13日(水)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 13…30〜15…30

まず最初に、岡田さんがお元気になられたことを喜び、花の宴を兼ねて「東京漢点字羽化の会」全体(当然学習者も一緒)で、お食事をしようという話になった。日時は、3月23日の学習会の日、学習開始時間を少し早めて、学習時間を短縮して、後、お食事をを行うことにし、その場所と参加者の確認をした。

『ニッポン人・脈・記』の一部届いていないところがあることについて再確認し、Sさんが纏めてくださり、3月22日にはデータを添付していただき、読み始めさせていただいている。

「季をひろう」のグループ分けを決めた。新しい人もグループの正式メンバーとして入っていただいた。



「季をひろう」その他の文章で頻繁に使われる「アクサングラブ」の使い方の復習、ルビの付け方、「@」の使い方、文章中に必要なスペースなどについて丁寧に復習していただいた。

3月20日、Iさんに印刷をお願いした。

Iさん、いつも横浜までお出でくださいましてありがとうございます。どうぞございます。

古語辞典の進捗状況の報告と、まとめの責任担当者からの、入力に関する注意の指摘に従って、再確認した。担当者のSさんから古語辞典は「エ」までまとまったことも報告された。

古語辞典の原本を、p387〜400までを分担して持ち帰りくださった。

400ページから「ク」に入るといふ。

### \* 予告

4月の例会(第89回)、2013年4月10日(水)

ヒューマンプラザ第1会議室 13…30〜15…30

4月の学習会(第67回) 2013年4月20日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室 18…30〜20…30

5月の例会(第90回) 2013年5月8日(水)

ヒューマンプラザ7階第2会議室 13…30〜15…30

5月の学習会(第68回) 2013年5月18日(土)

ヒューマンプラザ7階第1会議室

### わたくしごと

これは15、6年前のことである。

信仰の友・Bさんとわたしは、礼拝のとき何時も並んで座っていた。病弱な彼女は、教会の大きな奉仕はできないけれど、聖餐式のとき、聖餐台までわたしを連れて一緒に行ったり、点字の讚美歌を持ってきたりするくらいはできる、と喜んでしてくれていた。天真爛漫でお話の上手な彼女と会うのは、教会へ行くわたしの楽しみのひとつでもあった。

あるとき彼女が言った。

「姪がね、どうしても一度はわたしをイタリアへ案内したいって言うの。健康に自信がないって言ったら、おばちゃんのこと全面的に責任を持つ、おばちゃん荷物も持つ、もし、今日はホテルで休みたいって言うならそれもかまわない。これまでおばちゃんの健康状態を見ていて、今が一番安定しているように思えるから、是非十日間の旅行をしよう。イタリアにはおばちゃんの興味を誘う美術も教会も一杯ある。それにどうしてもおばちゃんに見せたいところもあるから」

てしきりに言うのよ。どうしようかな？」

「思い切って行ってらっしゃいよ。あなたのことずつと見ている姪御さんがそこまでうけおってくれるのなら、大丈夫よ。それがチャンスつものだわ」とわたしは大いに勧めた。

その彼女から「無事帰って来たよ」と元気な声の電話があった。礼拝は、旅行中と、休養を含めて二度はお休みすると思つたのに、旅行中の一回の休みだけで現れた。自分でも驚くほど元気だと言いながら、「はい、お土産」と言つて10センチ四方のゴツゴツした紙包みを手渡ししてくれた。お土産は「お話一杯」、と思つていたわたしは驚いてしまった。空けて見ると、彫刻であることは分かるが、何かは分からない。

「何か、分かつたことを言つてごらん？」

「台があつて、その上に人が、だけど頭かなあ、二つあるよ」

「そうだよ、ピエタ」

「ええええ!!!? あのピエタ？」

わたしはまったく思いもかけない、すごいお土産に仰天!

「帰つて来て、電話したとき、お土産のこと言いたかつたけど、我慢したの。それにこれを早くあげたくて、教会休まずに、今日来たの。あのね、あなたへのお土産何にしようかつてずっと考えてたの。十字架も考えたけど、ちよつとぴんとこない。そんな毎日のある日、サン・ピエトロ寺院へ行つて、この本物のピエタを見たとき、身体が震えたの。ああ、本当にイエス様に救われているのだ、これを見せてもらつただけで、この旅行は充分だつて思つたの。他の人たちは、あちこち見て回つていたけど、わたしは引きつけられて動けずにピエタだけを見ていたわ。そして、木村さんにはこれだ、これ以外には無い、そう思つて、寺院を出てから、あちこちお店を探したの。これがないはずはないつて必死で捜したの。もう時間切れになりかけたとき、露天商のようなところで、やつと見つけたの。売っている人が、自分で彫つて、幾つか貯まつたら、ここへ売りに来るんですつて。だから箱もなんにもなくて、その辺の紙よ、日本でいえば古い新聞紙のようなもので包んでくれたの。大きさも、大小三つ四つあつたけど、これならさわつて分かると思つたの。大きいのはわたしが持つて行けない。小さいのは細工

が細かすぎて、木村さんがさわっても分かりづらい、これならそこそこ彫りの形も分かってもらえるだろうって思ったの。ミケランジェロ25歳のときの物だつて、すごいねえ。わたしピエタの前に一日中居てもいいと思った、ただ、椅子は欲しかったけどね」

正確な素材は分からないけれど、石の一種であろう。正面に MARIA が座っている。MARIA の頭は、自分の右手で背中を抱えているキリストを見つめるように、少し右に傾げている。MARIA は、普通の子供を、その膝に横座りに座らせると同じように、キリストを抱きかかえている。MARIA の右手は、キリストの背中から脇の下を通って抱えているので、キリストの右肩は少し高く上がっている。キリストの右手は、自然に垂らされているが、左手は MARIA の身体と接しているのを見えない。MARIA の左手は、キリストの左足を押さえているので、キリストの左足は MARIA の左側の膝から自然に座っているように、膝を曲げて下ろしている。右足は、MARIA の手からは外れているので、左足から少し離れて下ろされ、その先は、左足より下がった位置で台座に着いている。MARIA の足先は、MARIA の衣裳から少し出っていて、これもさわられる。MARIA

の衣裳の深いひだと、ベールの自然なドレープも見事にさわられる。

「姪が、わたしにどうしても見せたかったものは、このピエタだったんですって。だからピエタ見学の日に、わたしが元気でいて欲しいって、それだけは願っていたんですって。それでわたしがこのピエタに魅せられているのを見て、自分の予想通りだった、無理をさせても誘ってよかったと思っただんですって。でも友達のために夢中でこれを探すとは思わなかったって言うの。」

実物のピエタの大きさは、台座を含めて、高さ174センチ、横幅195センチ、奥行き69センチだという。わたしのミニチュアレプリカは、高さ9センチ、横幅8センチ、奥行き5センチである。

我が家へ来てくださる友人たちにこれを見せると、誰もが、MARIA の悲しげな様子、ただの悲しみではない、清らかな崇高な顔、単なる人間の母子でなく、キリストへの感謝のまなざしと、キリストの、全てのものに降り注ぐ愛を感じ取れると、ノンクリスチャンの人も言ってくれた。

当時、わたしが住んでいたところは狭くて、この小

漢文のページ

春望詞

薛濤

空 不 佳 風  
結 結 期 花  
同 同 猶 日  
心 心 渺 将  
草 人 渺 老

「春のをとめ」

しづ心なく散る花に  
なげきぞ長きわが袂  
情をつくす君をなみ  
つむや愁ひの  
つくづくし

佐藤春夫 訳（車塵集）

金縷衣

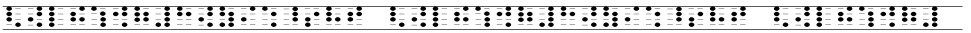
無名氏

勸 勸 莫 惜 金 縷 衣  
君 君 莫 惜 金 縷 衣  
須 須 惜 少年 時  
花 堪 折 直 須 折  
待 無 花 空 折 枝

君に勧む 惜しむ莫かれ金縷の衣を  
君に勧む 須らく惜しむべし 少年の時を  
花有りて折るに堪えなば 直ちに須らく折るべし  
花無きを待ちて空しく枝を折る莫かれ

綾にしき何をか惜しむ  
惜しめただ君若き日を  
いざや折れ花よかりせば  
ためらばば折りて花なし

佐藤春夫 訳（車塵集）



春 望 ノ 詞 薛 濤

風 花 日 ニ、 ルニ 将 ニ 老 イント

佳 期 猶 渺 渺 タリ

不 結 バ 同 心 ノ 人

空 シク 結 ブ 同 心 ノ 草



風花 日に将(まさ)に老いんとするに  
佳期 猶(なお)渺渺(びょうびょう)たり  
結ばず 同心の人  
空しく結ぶ 同心の草



薛 濤

佳期=逢瀬。すばらしい時。  
渺渺=はるかで遠いさま。  
同心人=心を同じくする人。恋人。  
結同草=草を同心結びにする。  
同心結びは、ひも結びの一種  
で相思相愛を願う。

薛濤(せつとう)  
768~831年。中唐の妓女。詩人。  
魚玄機とならび詩妓の双璧と称せられる。

無名氏(「読み人知らず」にあたる)  
「金縷衣」は杜秋娘(としゅうじょう)の作  
とするものもある。作者不詳の民謡歌謡  
を杜秋娘が歌い広めたとも考えられる。

※「車塵集」は、佐藤春夫の漢詩の訳詩集。唐・明時代の  
女流詩人を中心に48篇を収める。冒頭の詩は「金縷衣」。

奥平卓「漢文の読みかた」(岩波ジュニア新書)他参照

漢文のページ

春望詞

薛濤

空 不 佳 風  
 結 結 期 花  
 同 同 猶 日  
 心 心 渺 将  
 草 人 渺 老

「春のをとめ」

しづ心なく散る花に  
 なげきぞ長きわが袂  
 情をつくす君をなみ  
 つむや愁ひの  
 つくづくし

佐藤春夫 訳(車塵集)

金縷衣

無名氏

勸 君 莫 惜 金 縷 衣  
 勸 君 須 惜 少 年 時  
 有 花 堪 折 直 須 折  
 莫 待 無 花 空 折 枝

君に勧む 惜しむ莫かれ金縷の衣を  
 君に勧む 須らく惜しむべし 少年の時を  
 花有りて折るに堪えなば  
 直ちに須らく折るべし

花無きを待ちて空しく枝を折る莫かれ  
 綾にしき何をか惜しむ  
 惜しめただ君若き日と  
 いざや折れ花よかりせば  
 ためらば折りて花なし

佐藤春夫 訳(車塵集)





春 望 ノ 詞 薛 濤

風 花 日 ニ、 ルニ 将 ニ 老 イント

佳 期 猶 渺 渺 タリ

不 結 バ 同 心 ノ 人

空 シク 結 ブ 同 心 ノ 草



風花 日に将（まさ）に老いんとするに  
佳期 猶（なお）渺渺（びょうびょう）たり  
結ばず 同心の人  
空しく結ぶ 同心の草



薛 濤

佳期＝逢瀬。すばらしい時。  
渺渺＝はるかで遠いさま。  
同心人＝心を同じくする人。恋人。  
結同草＝草を同心結びにする。  
同心結びは、ひも結びの一種  
で相思相愛を願う。

薛濤（せつとう）  
768～831年。中唐の妓女。詩人。  
魚玄機とならび詩妓の双璧と称せられる。

無名氏（「読み人知らず」にあたる）  
「金縷衣」は杜秋娘（としゅうじょう）の作  
とするものもある。作者不詳の民間歌謡  
を杜秋娘が歌い広めたとも考えられる。

※「車塵集」は、佐藤春夫の漢詩の訳詩集。唐・明時代の  
女流詩人を中心に48篇を収める。冒頭の詩は「金縷衣」。

奥平卓「漢文の読みかた」（岩波ジュニア新書）他参照

## 編集後記

▼岡田さんが元気を取り戻されました。本当に、おめでとうございませう。関係者一同ほつとしいるところです▼岡田さんの手術後の闘病生活は一進一退で、かなり長引いていました。しかし、われわれとしてはただ心配しながら見守る以外になすすべがありませんでした▼岡田さんは、現在、われわれのグループの漢点字訳と並行して、別のグループを率いて「常用字解」の音訳作業を進めておられます。これは主として中途失明者のために、何とか漢字に関する理解を深めていただくとうと始められたこのことです。そのグループの方たちから、個々の漢字の説明をするのに疑問が生じて、岡田さんに質問を浴びせかけますが、どんな問題に対しても適切な回答が返ってきます。それぞれの漢字に関する理解の深さに、皆さんから賛嘆の目が向けられています。毎日、漢字を自分の目で確かめながらの生活をしているわれわれでさえ、文章を書くのにパソコンの変換に頼っていると、たまに手で文字を書こうとすると、漢字が書けなくなっていることにびっくりします▼得難い才能を持ち、努力を惜しまない岡田さんに、これからもいつまでも元気で活躍されることを祈ります。

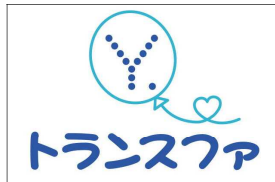
木下 和久

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者総合支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@Ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。